

〔連載〕 武蔵御嶽神社宝物シリーズ14 くりにからのおたち 俱利迦羅太刀

日本風俗史学会 会員 齋藤慎一
青梅市文化財保護審議会委員

武蔵御嶽神社の神宝として 二年(一五七二)二月八日、伝わる刀剣は、現在六二振と 二代正重の寛永九年(一六三二) 享保四年(一七一九) 二)二月吉日等四振の下原鍛冶の作刀がある。すべて御嶽(浅羽)蔵人と社僧世尊寺、御師名主五人の三方立合で作った「武州御嶽権現御内陳(陣)御神宝目録之事」(馬場猛仲家文書)は、武蔵御嶽神社における現在最古の神宝目録である。この目録は作銘を略記し、寸尺を記録して合計三三振を書き上げる。筆頭は奥院(隠岐院) 御太刀(重文・鍔金長覆輪太刀)等四振の中世太刀、続いて下原と注される万治元年(一六五八)九月吉日銘の二代下原山本康重、元和九年(一六二二)二月吉日の四代照重、初代照重の元龜

神宝目録には「一、山本源次郎打_{下原} 三尺九寸五分」と書きあげられている。この太刀は全長151.6cm、茎長36.4cm、刃長118.8cm、身幅広く、区際で4.02cm、鋒で2.18cm。大鋒で鋒長6.45cm。重量約2.28kgの大太刀である。重厚く、区際で0.89cm、鋒で0.59cm。堂々たる太刀姿の反の中心は、ほぼ中程にある。いわゆる鳥居反で、全体では茎尻より88cmの箇所まで反り深く8.5cm、刃部では区際より55cmで4.9cmの反である。径0.79cmの目釘穴は当初のもの、茎尻より24.5cm、幅3.27cm、厚0.84cmの箇所にある。大太刀が神幸列に供奉する様は室町時代の「祭礼草子絵巻」に描かれ、また奈良春日大社若宮の「おん祭」の神幸列に見るところである。武蔵御嶽神社の神宝に大太刀が多い点は注目すべきである。鍛は板目に木目、流れ肌まじり、鉄色に黒みがあり、下原鍛冶の特徴という。刃文は互の目乱である。また下原刀は刀身に彫物の例が多いが、この太刀も佩表に区際3.7cmから全長34.3cmの俱利迦羅竜を彫る。俱利迦羅竜は、竜が剣にまわり昇り、剣先を呑まんと首をあげた図で、不動明王の化身であるが、宝壽丸太刀のような図ではなく、不動明王の種子の梵字カーンマインを圖案化する。梵字のウん点は花文字のようで、竜頭が剣先を呑む形になり、カー字以下が剣に絡みつく竜身に、マイン字の末尾は竜尾となる。下原鍛冶初代山本周重作刀に同様の図の例がある。佩裏には「南無天満大自在天神」と草書で彫る。不動明王と天神の取り合せは元禄一三年(一七〇〇)七月二四日、御嶽神主浜名左京、社僧世尊寺、名主惣代の三人より幕府普請奉行へ提出の「御嶽仏神躰覚」(須崎裕家文書)の「不動

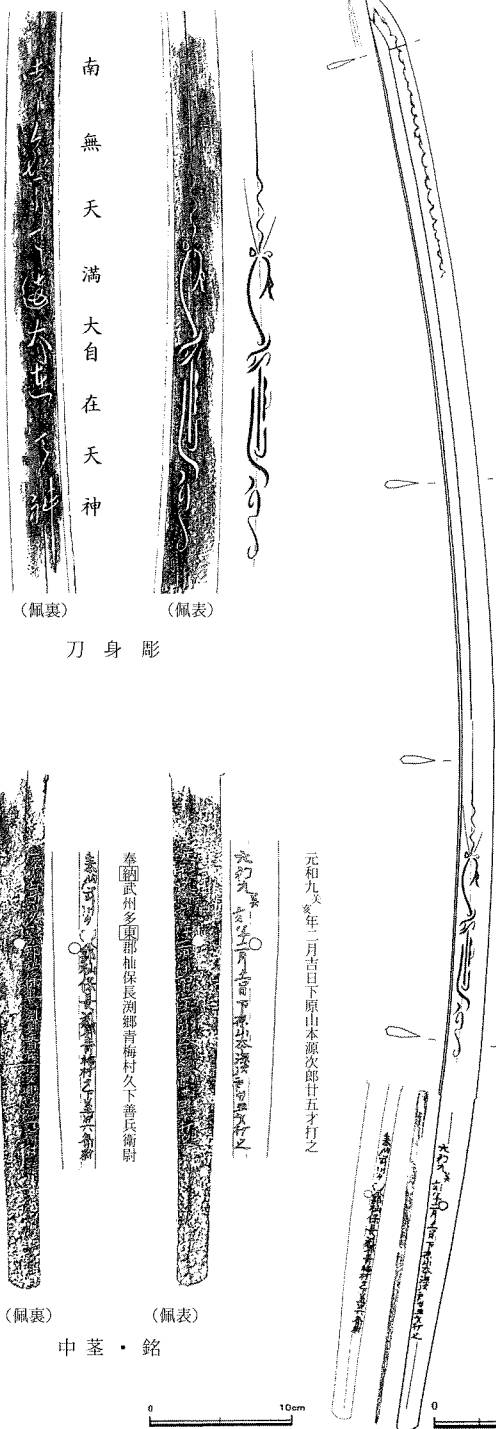
本殿之木尊」「天神_{六ヶ山嶽寺}」とある
仏神を意識したと思われる。

茎の佩表に「元和九年_{美二}二月吉日下原山本源次郎廿五才打之」、佩裏に「奉納武州多_園郡柚保長_淵郷青梅村久下善兵衛尉」と刻銘する。従来「十二月」「多摩郡」と読んできたが、今回「年二月」、また「東」の上部に朽ち込みはあるが、「多東郡」であることを確認した。一般に柚保や長淵郷は、市域今寺の報恩寺地藏堂の文禄五年(一五九

同族であろう。近世初頭の青梅村の住人として名前のあらわれる最初のひとりである。本遺例は三代目照重が元和九年七月一四日に没する五ヶ月前、源次郎の四代照重襲名以前の技量を示す作品として貴重である。また、近世初頭御嶽権現祭儀の一端を知り得る。同時に問題を残すが、推定の域にあった中世青梅村の所属郡表示の唯一の文献として、注目すべきである。さらに、当時の青梅村住人の御嶽

山への信仰のかたちを示し興味深いものがある。

調査には、友人伊藤博司氏・寺本靖氏・北村和寛氏の協力を得た。作図は引続き伊藤氏の尽力による。あわせて、「刀剣美術」441号(一九九〇年四月刊)所収の辻本直男氏等五氏執筆「美術館・博物館めぐり 36」の「武蔵御嶽神社宝物殿」より引続き学恩を頂いた。下原鍛冶については、村上孝介氏の「刀工下原鍛冶」(一九六九年刊都教委)、「武州下原刀展」(一九九八年刊 福生市教委) 図録解説の後藤安孝氏等の高説による。



俱利迦羅太刀実測図
作図 伊藤博司氏